



カメラ探訪

文学のふる里

その8 上熊本駅



停車場にて — ラフカディオ・ヘルシ —

警官ごろしの重要犯人が護送されホームにおりてくる。「いつもの通りのあわたたしさと騒音…下駄ばきの乗客の足音、新聞やラムネを売る子供たちが張り上げる呼び声のうちに列車は停った」。この作品に登場する停車場が、当時、池田駅と呼ばれていた上熊本駅である。現在の駅舎ができたのが明治24年。明治の文豪、漱石、寅彦らが熊本への第一歩を印した文学遺跡でもある。

わたしの ぼくの 郷土

北部町立川上小六年 西嶋 ユカリ

北部町の西梶尾に大浦屋敷と言う所があります。西は外井川、東は内井川といい、深い谷川があって南は七、八百メートル位の所で合流して半島のようになって、北は台地に連らなっております。そこに昔、鹿子木寂心という人の人がいたのでその人を大浦の方と言っていたそうです。寂心もその大浦の方も亡くなった後に阿蘇家の家老の娘さんが来たのでその人をお姫様と言ってそのお姫様の墓に参ると病気がなおるとかで、参りにくる人が多かったそうです。又、池田某と言う典医がいて、その子孫に池田健齋という医者がいました。その子が池田健十郎といい、昭和の初め死んでその屋敷も今は他の人が住んでいます。池田家の祖先の墓は鹿子木にあります。又大浦屋敷に後では即決裁判所のような所がありました。大浦屋敷の西側の谷の上に少し高い所が昔の墓と言われています。昔がけくずれがあった時、そこから刀やかぶとが出ました。私共の元の屋敷がこの大浦屋敷で祖父の代からさかのぼって五代までは名がわかっていますが、その以前は、いつごろから住みついたのでかわかりません。以上はみんな祖父から聞いた話です。

西梶尾には他に、かぶと塚とか勝負の浦とかあるそうです。又、西梶尾も以前、水田は少なくほとんど畑でしたが高台に水を揚げ開田し、今はたばこやメロンすいかが作られています。その後稲を植えるので、農家の収入も多いいと思います。でも国道は近く、児童館、小学校、中学校、役場が近くにあって市街化区域なので家がどんどんできて、三十数戸であったのが三倍位になったので農地は少なくなる一方です。

私は祖父の話聞き、今の北部町からは想像もできない昔のことを知りました。

古い歴史を持つこの町もどんどん変わっていますが、昔のことを知る手がかりになるものは、大事に残しておきたいと思っています。